

出張報告

「ワルシャワ調査出張」

2015年3月7日から30日まで、科学研究費助成事業採択課題「民主化と宗教の関係に関する考察：1970年代ポーランドを事例として」(25870724)の一環としてポーランドに出張し、国立公文書館現代史料館、カトリック教会のワルシャワ大司教区文書館、ワルシャワ大学図書館を中心に史料収集を行った。成果については2015年度に入ってから順次公表中であり、具体的な内容についてここで詳述することは差し控えたい。

以下では、調査の合間の見聞から印象に残った出来事を取り上げ、所感を述べる。

(1) 公文書と私的記憶

ホロコースト後のユダヤ人を主題としたドキュメンタリー映像に繰り返し立ち現れるモチーフに、家族のルーツをたどる旅というものがある。役所や文書館、宗教施設、墓地を訪ね、父母や祖父母、その兄弟の生と死の痕跡を突きとめてゆく。そのプロセスが持つ謎解きの要素はストーリーの推進力になり、アーキヴィストや担当官との緊迫した遣り取りや、ゆかりの場所や当時を知る人、写真や文書を探しあて涙を流すシーンなどは「作品」のクライマックスとなる。よもや自分が、それと同じ光景をポーランドの文書館で来る日も来る日も眺めながら作業をする羽目になるとは思ってもいなかった。

昨今ポーランドにおいては、家族のルーツを探究し、家族史を記述したり、家系図を作成したりすることが流行しているらしい。国立公文書館ウェブサイトには、「家系図作りの始め方」というマニュアルも作成されてい

る (<http://www.20090209.archiwa.gov.pl/pl/dla-uytkownikow-archiwow/genealogia.html>)。ただし、このサイトは、家系図作りをきっかけに史料に親しみましょうという趣旨ではなく、常識的な必要最低限の下調べをしてから公文書館に来るよという警告文のようにも見える。私は、普段ワルシャワでは、社会主義期のいわゆる「共産党」や中央官庁の行政記録が収蔵されている国立公文書館現代史料館に通っているため、これまで個人情報を求めるこの手の来訪者に遭遇することは比較的稀であったように思う。

この度、初めてカトリック教会のワルシャワ大司教区文書館を訪問し、資料を閲覧したのだが、毎日のように家族のルーツを調べにやってくる人がいることに驚いた。電話での問い合わせも度々ある。文書館を管理しているシスターとアーキヴィストが溜息をつきながら対応するのだが、その都度、資料の出庫が滞り、コピーの注文書が溜まり、たびたび作業を中断されるアーキヴィストの機嫌が悪くなり、実に厄介なことになっているというのが第一印象であった。前述の国立公文書館の閲覧室は数十人の研究者や学生でごったがえしており、時に席も奪い合いになるほどである。普段通っているクラクフ大司教区の文書館は、白い手袋をはめて、恭しい手つきで中世の写本を読む学生ばかり（その中に交じって、私は無風流にも、社会主義期の教会行政に関する史料を閲覧しているのだが）。したがって、文書館は研究者のためにあるものと思いついていたのだが、教会の文書館がこういった形で市民にサービスを提供してい

るということを（むしろ、現在のポーランドにおいてはそれが主流であるらしいことを）遅まきながら理解したのだった。

ある種の諦念とともにそのことを受け入れれば、閲覧室に響き渡る利用者とアーキヴィストの話し声も、20世紀初頭に生まれたポーランド人たちの生と死にまつわる極めて私的な語りが聞ける、なかなか得難い機会であると感じるようになった（もちろん、こういったものは「立ち聞き」であって、研究の資料とはならないのだが、外国人が論文や史料を読んだだけでは到底理解し得ない、皮膚感覚のようなものをつかむためには貴重な経験であると考え）。来訪者は、情報を探している人物の氏名、生年月日や生まれた所番地、そこから類推される所属教会、洗礼を受けた年月日、堅信の年、結婚した年など、知っているありとあらゆることをアーキヴィストに語る。情報量にはかなりの個人差がある。時には情報探索には無用とも思えるエピソードも差し挟まれる。アーキヴィストは、来訪者の語りを軌道修正しつつ、聞き出した断片的な情報を組み合わせながら、デジタル化されたデータベースからさらなる情報を探し出す。

やがて私にも、シスターとアーキヴィストの深い溜息の真の理由もわかってきた。大半の人が何の手がかりも得られず帰って行くのだ。ワルシャワ市街地のあるヴィスワ川の西岸地区の文書は戦災でほとんど焼けていて、そもそも資料が現存しないのである。1944年のポーランド国内軍（レジスタンス）による蜂起に対する報復として、ドイツ軍はワルシャワ中心部のありとあらゆるものを文字通り「灰燼に帰す」までに破壊し尽くした。ヴィスワ川東岸のプラガ地区、南部のモコトフ地区などを除き、戦前の記録が保存されている教会はごく僅かのみである。こちらはワルシャワ市民の経験した過酷な歴史に思いを馳せながら、さもありがたんと聞いているのだが、

訪問者はそれでは収まらない。特に戦争を経験したと思しき世代の訪問者は、往々にして感情を高ぶらせる。アーキヴィストは、それを宥めたり、慰めたり、場合によっては怒鳴り返したりして、お引き取り頂くのだが、傍で息を詰めて成り行きを見守っているこちらも、深い嘆息とともに来訪者を見送らずにはいられないこともあった。

孫、曾孫世代の来訪者は淡泊だ。携帯電話で家族に「無いって。焼けたって。もう帰るよ」などと報告している。彼らは、戦争の歴史を「知って」いて、記録は焼けて存在しないという事実を論理的帰結として「理解」している。ただし、彼らがそれについて何も感じていないと断じるわけにはいかない。戦時中に処刑された祖父の埋葬場所が判明することよりも、「戦時中に処刑された祖父が埋葬された本当の場所も分からない私」としてのアイデンティティを持つことのほうが、彼らの人生により大きな影響を与える可能性がある。前述のホロコースト後のユダヤ人を描いたドキュメンタリー映画群の中で、サブテーマとなるのは記憶の継承と世代間の断絶である。「断絶」とは単なる無関心とは限らない。家族のルーツをたどる旅の中で、第一世代と第二世代、第三世代は別の場所で感情を高ぶらせる。「時ならぬ」シチュエーションで泣き出した子に、親が怒りをぶつける場面が映し出されることもある。戦争にまつわる記憶の継承の限界に注目が集まる昨今、自ら経験していない「経験」にまつわる「記憶」の形成と、その可塑性に焦点をあてた研究の重要性はさらに増すと考える。

さて、文書館では、記録を見事探し当てたケースにも遭遇した。やはり感動の瞬間なのだ。来訪者は涙ぐみ、アーキヴィストも嬉しそうに声を弾ませている。さて、その文書を読覧し、コピーする段になって、アーキヴィストに「文書はロシア語ですが、読めますか?」と尋ねられ、来訪者はたじろぐ。苦々

しげな表情を作りながら「一応習ったので、名前くらいなら読めます」と答えるが、これは社会主義期、ソ連からの押しつけで必修となったロシア語の成績がいかにも悪いかを自慢し合ったというポーランド人独特のレトリックで、支障なく読めるという意味である。第一次世界大戦を経て独立を勝ち取るまで、ワルシャワはロシアの統治下に置かれていたが、カトリック教会の文書がロシア語で記録されている（場合がある）ということは、私は承知していなかった。

父母、祖父母の生の痕跡を求めて文書館から文書館へとさまよい、ようやく目当てのものに辿り着けば他国語で書かれたその記録を手にする。ワルシャワ市民にとっての「家系図作り」とは、そういった種類の体験なのだという事を思い知らされた。

(2) 墓碑の公共性

そのような日々を送っていたためか、文書館からの帰り道、オペラ座のそばのフランシスコ会修道院の壁にふと目がとまった。共同墓地の壁一面に墓碑が埋め込まれている。

墓碑には、男たちの良く似た境遇が記される。国内軍（レジスタンス）兵士でワルシャ

ワ蜂起参加者であったブロニスワフさん（享年45）と、1945年1月に強制収容所で亡くなった2人の息子ヴァレンティさん（同15）、ロマンさん（同17）。マウトハウゼン強制収容所で1945年4月に亡くなったアントニさん（同40）。国内軍兵士でワルシャワ蜂起参加者だったヴィトルトさん（同20）はライトメリツ（リトムニェジツェ）の収容所で亡くなった、とある。捕虜となり、「カティンの森」でソ連の特務機関（NKVD）によって殺害された将校たちの墓碑もある。その「カティンにて」の文字は、後から書き足されたのか敢えてそのようにしたのか不自然に大きかったり、塗りつぶした後で彫り直されていたりするものもある。



ワルシャワは碑の多い町である。「ここで、戦時中、○人のポーランド人がドイツ軍によって殺された」などという碑やプレートがそこかしこに設置されている。そればかりでなく、都心の街角の教会や修道院の壁にはめ込まれた1つ1つの墓碑が、戦争の歴史を物語る、いわば公的な存在として、ワルシャワの都市景観を構成していると言えるだろう。

（加藤久子）